

ジョン・アップダイク（三）

—少年期と父の存在—

岩 元 巖

(1) 父親ウェスリー

アップダイクは2009年1月27日に肺癌のために死去している。1932年3月18日生れだから、77歳を間近に控えてのことだった。亡くなった年に最後の短編集として発表されたのが『父の涙』(*My Father's Tears*)で、同名の短編が収められているから、この章を書くのに格好の物語となっている。また同時に、父親を題材にした短編を収めた作品で作家生活を終えたということは、外見ではあまり影響を与えていなかった父親の存在が実は隠れた部分でアップダイクに大きな意味を持っていたのかもしれない。それが暗示的で印象的でもある。

前章で述べたように、アップダイクは母親に強い影響を受けた作家だが、それだけにまた愛憎二面の感情を母親に対して抱いていたと考えることができる。その点についてはすでに前章でも示唆したが、後に彼が書く自分自身の結婚生活を素材とした幾つかの作品の中でも指摘することができる。

それに反し、父親に対しては、一般に考えられている「父親対息子」という概念とはずいぶん異なる感情——憐憫と愛着——をアップダイクは抱いていたように思える。というのは、父親のレスリーは好人物であったが、母親とは正反対で、自分自身いわゆる「ダメ男」「Underdog」を認める人で、自らを過小評価し、無能を売り物とし、息子を母親ゆずりの才能を持ち、やがては必ず世に出る人物と考えている男だったからである。

アップダイクは少年の頃からそういう父親に対し密かに愛着は持っていたのであろうが、決して敬意を持って接するということがなかったようである。特に、彼は父親が数学の教師として勤める中学・高校で学び、しかも一家がシリントンからプラウヴィルに引越してからは三年半にわたって父と学校への往復をともにしなければならなかったという事情から、父親の人間としての現実を常に見ざるをえなかった。このため、アップダイクは少年期の多感な時期を通して、権威者としての父親像を自らの心象の中に築くことができなかった。しかし、それがかえって父親を素材として虚構化するとき、小説の中の人物として面白く作りあげることができたのであろう。

父親を素材とした短編は初期に描かれた「銀の都に澄んだ目を」(“The Lucid Eye in Silver Town”) 以外はあまりなく、初期の名作「鳩の羽根」や「四つの物語」などに傍役として登場するだけであるのだが、彼の初期の代表的長編小説で、しかも野心的な試みを見せた『ケンタウロス』(*The Centaur*, 1963)で、正面切って父親をモデルとし主人公に配している。彼はこの小説で1964年に全米図書賞を受けている。後に、彼はいわゆる「ウサギ・シリーズ」の四部作で広く国の内外で知られるようになったため、この『ケンタウロス』があまり人々に読まれなくなっているが、実際はアップダイクの最高の作だと筆者は思っている。この章の後半で、彼が描いた父親像と作品の詳細について述べていくことにする。

実際の彼の父親ウェスリー(Wesley Russel Updike)の経歴については、すでにアップダイク家の歴史を書いた折りにかなり詳しく述べたので⁽¹⁾、ここでは『ケンタウロス』と密接にかかわることだけを簡略に記すことにする。ウェスリーは牧師だった父親ハートレイの次男としてニュージャージー州トレントンで成長しているが、晩年に声を失い不運だった父親を見て成長した故か、人生を当初から悲観的に見る人間になっている。優秀で父と同様にプリンストン大に進んだ兄とは大違い、やっとアーサイナス大学を出、様々な雑職についた後、妻となったリンダ・グレイスの実家があるシリントンの義父母の許に転がりこむという男だった。

彼は一時レディングでホテルのフロントをやったり、電話会社の電話設営の仕事をしたりしていたが、レディングにあるオールブライト大学で教職の単位を取り直し、高校教師の資格を取得すると、リンダの親戚の町の有力者(『ケンタウロス』のハメル氏のモデル)の世話でシリントン高校の数学の

教師となった。ウェスリーは生涯この教師職をつとめたが、当時は不況のあおりで教師職も一年契約、しかも年俸わずか1,200ドルという安いものだったとのことである。

ウェスリーは数学教師としてもさえない人物で、性格は優しく、世話好きだったため生徒からは尊敬こそされなかったが、人気者だった。社会的にも、誰かれなしに親切なお人好しで、教会では役員をつとめ(神を信じない合理的精神の強い人だったにもかかわらず)、町の人々から大いに愛され、そのくせ自己卑下の強い人物だった。ただ、落ち着かない性格で、常に何か動きまわっていないかならなければならないというタイプで、幼年期から少年期のアップダイクを淋しがらせている。そのためにも、彼が母の存在に強い影響を受けた原因を作っていたのかもしれない。

このようないわゆる「ダメ男」の父親に比して、アップダイク少年はパークス郡一の秀才としてシリングトン高では特殊な存在だった。そのために、父親のウェスリーはたえず息子に一目おくという奇妙な親子関係を形成していた。そのような奇妙さが『ケンタウロス』の基盤となり、小説的な面白さとなっているが、それでいてこの愚直な父は父なりに優れた息子を何とかして世に出したいと考えている。その感情は、息子を田舎町から広い世界へ飛び立たせたいと狂おしいほどに考えていたアップダイクの母親の気持ちと相通ずるものがある。『ケンタウロス』の底流には、父親の愚かしいほどの挫折の数々を述べる表面の物語の底に、息子を世に送りだすためには自らの命を賭してもという父の願いが横たわっている。この点についてはまた後で詳しく述べるが、まずこのようなウェスリーを素材としてアップダイクがどのように短編で描いたのかを見ていくことにする。

(2) 「父の涙」や他の短編の中の「父」

アップダイクの遺作のように書かれた短編「父の涙」⁽²⁾の冒頭は次のように始まる――

僕は父が泣くのを一度だけ見たことがあった。まだ汽車が走っていた昔、オルトン駅でのことだった。僕はフィラデルフィアに向かうところで――30番街駅に至るわずか一時間ほどの旅――そこからマーケット通

り駅に出、大学のあるボストンまで行く汽車に乗る予定だった。僕の心はすでにはやりたっていた。というのも、家も両親も僕にはもう遠い存在になっていて、学問を学び、大きな野心を与えてくれるハーヴァード、それに二年になって僕が得たガールフレンドなどの方が学期が進むごとに現実で身近なものになっていたからだった。だから、父が別れぎわに僕に握手をしたとき、その目に涙が光っているのを見て、僕は驚いた。言うなればまさに「肝をつぶす」思いだった。(3)

拙訳で長い引用を示したが、原文はさり気ない、それでいてリズムのある文体で、文章発端の“cry only once”とそれを受ける最後の“my father's eyes glittered with tears”の表現が合致し、しかもそれが小説全体を締めくくる文章(後で述べるが)と共鳴するように仕組まれているのが見事である。

物語自体は大学二年の復活祭イースターの休暇を故郷で過ごした主人公がペンシルヴァニアの田舎町の駅頭で両親と別れた後、ボストンで待つ恋人と大学へと戻る汽車の旅から始まっている。そして、デボラというその恋人の話から、彼女の父親の話(この人はユニテリアン派の牧師ですが、妻を亡くしてからアルツハイマー病にかかり、最後は老人ホームに入り、亡くなっています)へと移り、その義父となる人の対照としてまた自分の父の話へと戻る。

実は主人公の僕はデボラと結婚しますが、中年になってどうもうまくいかず、夫妻で離婚すべきかどうか確かめる意味もあってイタリア旅行をする。(これはアップダイク自身の体験をもとにしている。彼は1972年に妻のメアリと今述べたと同じ目的でイタリアに旅をし、これをもとに「ローマでのツイン・ベッド」⁽⁴⁾という短編を書いている。)夫婦がローマの宿に着いたとき、母親から父が再度の心臓発作で入院し、危ないかもしれないので帰ってこれないか、と電話で言われる。二人はすぐさま帰るべく、ローマからロンドンへ飛び、アメリカへ帰る飛行機を待つためにホテルに泊まるのだが、再び母親から電話があり、父の死を報せてくる。主人公の僕はすでにベッドに入っていたのだが、母からの電話を切ると、デボラにそのことを告げた。すると、彼女は優しく僕を抱き「泣きなさい」と言ってくれた。しかし、どうしても涙が出てこない。泣けないのだ。なぜなら「父の涙が僕の涙をすっかり使いつくしてしまっていたからだ」⁽⁵⁾と、物語は終わっている。

ここで小説の冒頭で書いた「父の涙」が息子を大学を送り出す際のものに

しては尋常ではなかったことが判然とし、冒頭の一文と簡潔な“My father's tears had used up mine.”としめくくる文章が共鳴する仕組みとなっている。そこには、大袈裟には表現しないが、父親への抑制した主人公の愛情が滲みでている。父と息子は男同志として、強い母親に対する感情を共有し、遠慮するように、たがいへの愛を言葉として表現しない。いや、むしろ息子はそれを苛立たしく思い、父を批判してしまう。この事は、アップダイクが非常に早い時期に描いた短編、「銀の都に澄んだ目を」⁽⁶⁾ にすでに書き表わされている。

この短編は、事業で成功している兄がシカゴからニューヨークに仕事でやってくるというので、父親は息子にぜひ会わせておきたいと考え、ペンシルヴァニアの田舎町から日帰りで息子連れをいき、大都会を体験させる物語となっている。これもアップダイクが少年時代に体験した事実をもとにしている。すでに第一章で述べたように、ウェスリーの兄、アーチボールドはフロリダでオレンジ栽培で成功した事業家で、なかなかのやり手(“go-getter”)だった。この小説に登場する少年の伯父は彼をモデルとし、少年は13歳のアップダイク、少年の父親はウェスリーをモデルとしたもので、父親は息子もまた“go-getter”だから、ぜひ成功者の叔父に会わせたいと願っての企てだった。

しかし、物語では、事は父と息子が期待しているようには進まない。少年が13歳ということになっているから、彼をアップダイクの分身とすれば、ちょうど1945年のこととなる。時代はまだ貧しく、父親はニューヨークまでの往復の切符代と、少年が大好きなフェルメールの画集を買うための5ドルを持つだけである。兄はグランド・セントラル駅のすぐ近くの豪華なホテル(ウォルドフ・アステリアだろうと推測できるが)に宿泊しているが、ペンシルヴァニア駅に着いた二人を迎える車をよこしていない。(ニューヨークには二つの駅があり、グランド・セントラル駅は42丁目、ペンシルヴァニア駅は23丁目にある)お金のない二人は16区画の道程を歩いて、やっと目的のホテルに着いている。

ホテルでは伯父は二人の客と談笑しているので、お人好しの父親は遠慮して、寝室に息子とじっと客の帰りを待ち、後で伯父から笑われてしまう。伯父は愛想はよいが、自分の羽振りの良さを見せるためか、二人を有名なクラブへ案内し、その後、少年が求めたいと考えている画集を探すために街へ出る。しかし、その折りに、少年の眼に何か異物が入り、三人は慌ててホテル

へ戻ってくる。父親はハンカチで息子の眼から異物を取り除いてやろうとするが、伯父がそれをおしとどめて、ホテルの医者と呼ばせる。

医者が来て、少年の眼から取り除いてくれたのは彼の瞳でしかなかったが、医者は治療代として5ドルを請求し、父親はなげなしの5ドルをはらわなければならない。この間、伯父はどこかに消えていて、医者が帰った後、悠然と洗面所から姿を現わす。そして、まあ夕食でも一緒に、と伯父は言うが、二人はその言葉をさえぎって、帰途につく。少年は苛立つ。父親が医者に払った5ドルのことをくやみ、「兄貴が医者をよこしてくれと言ったとき、この私が払わなきゃいかんとわかっていたんだ」⁽⁷⁾ と言うからだ。少年はそのような父をなじり、「どうして伯父さんが払うの？ 払うのは当然父さんでしょう」と言い、その言葉にすっかり気を落とす父親を、そしてその不甲斐無さを少年は汽車がニューヨークの街をはなれるまでなじり続ける。

この父親の姿をアップダイクの父、ウェスリイそのものとは言わないが、かなりその現実像をとらえていたと想像できる。「父の涙」の一節でも、テボラの父親を描きながら、それに比べて自分の父親はまったく違うと書き、「僕の父はいつもダメ男を演じていた。学校でもどこでも毎日ダメ男を演じ、恥かしくて見ていられないような事ばかりを繰り返す男^{ひと}だった」⁽⁸⁾ と書いているのであるから。

(3) *The Centaur* について

この「ダメ男」、息子を常に恥ずかしがらせるような行為ばかりする父親の姿と、その存在の意義を丹念に、しかも隠された愛情をもって描きだした長編が *The Centaur* だった。この長編小説は物語自体は単純だが、構成や文体は非常に複雑で、アップダイクにしては珍しく実験的小説の形をとっている。しかし、作者の意図は、これまで短編小説の中でしばしば傍役として登場してきた無能な父親の心情と行動をより具体的に描き、父親が未来の可能性を大きく秘めている息子をどのようにして世に出すべきかを、そしてその抑制した愛情を示そうというものだった。いわば、アップダイクが現実の父に対して捧げたホームメッジでもあった。

主人公となる中年のダメ男、ジョージ・コールドウェルはオリンガー高校 (Olinger High) の理科教師。その息子のピーターは15歳で同じ高校の2年生。

二人はオリンガーから数マイル離れた農村に住んでいるため、ジョージの車で一緒に高校に通ってくるのだが、1月の中旬、雪のために家に帰ることができなくなり、三日間共にオリンガーの町で過ごす羽目になるのだが、その体験を物語のプロットとしている。

ただし、ギリシャ神話を下敷きとして使っているので、ジョージはケンタウロス族の一人、賢者で神々の教育に当たったケイローン(Chiron)でもあり、息子のピーターはゼウスによって岩に鎖でつながれたプロメテウス、校長のジーママンがゼウスとなっている。そして、第三人称で語られていくジョージを主人公とした章は文体を古めかしくし、神話と現代の現実的描写が混交し、それと交互に提示される章は、語られる事柄の時点より数年後、成人したピーターが画家となり、グレニッチ・ヴィレッジで黒人女性と同棲していて、彼女との寝物語に語りだす形となっている。まず、図式で、構成を示してみる。

章	主人公	時代
I	ジョージ	神話と現代
II	ピーター	現代
III	ケイローン	神話
IV	ピーター	現代
V	ジョージ	現代 (追悼記)
VI	ピーター	神話と現代
VII	ジョージ	現代
VIII	ピーター	現代
IX	ケイローン	神話
終章(エピローグ)		神話

なお、第五章は、ジョージ・コールドウェルの追悼記 (Obituary) となっている。これは故人の経歴を葬儀に参列する人々のために教会や故人の遺族の者が用意するパンフレットに記すものである。五章の時点では、ジョージはまだ死んではないが、作者は愚行をくり返す主人公をまったく別の面から描くという意図でこれを用意し、また同時に彼の死を示唆している。アップダイクの工夫を知るために、まず小説の書き出しの部分を示してみる。

コールドウェルは振り返った。そして、振り返ったその時、彼は踵に矢を受けた。クラスの者がドット笑いだした。苦痛がほっそりとした脛の中心部をかけあがり、膝の中で渦を巻き、さらに広がりが、^{いかずち}雷のようになり下腹にまで突きささった。彼の眼は思わず上の方、黒板へむく。そこには、宇宙形成からの年月、50億の数字が書かれていた。クラスの者たちの笑いは、最初の驚きを表わす悲鳴の調子から今や意図的に彼にむけられた野次の調子となり、彼にむかって押し寄せて、彼が必至に願う自分だけの世界を粉々に打ちくだくように思えた。……⁽⁹⁾

ギリシャ神話では、ケンタウロス族の賢者ケイロンは結婚式の集りの折り、ケンタウロスの一人が花嫁を盗み去ろうとし、その場にいたヘラクレスが彼にむけてはなつた毒矢をあやまって踵に受けてしまう。その永遠の苦しみに彼は耐えかねて、ゼウスに自らの不死を返上し、その代りにプロメテウスの鎖を解いてもらうように乞う。ゼウスは彼の行為を哀れに思い、彼を天に迎え、永遠の星、サギタリウスとする。

この冒頭は、神話を現代に移し、ジョージが科学の授業をしている最中に、ふざけて生徒の一人が放った鉄製の毒矢を踵に受けるという設定となっている。彼はすぐさま教室を後にし、学校の隣にあるハメル氏(神話のヘーフアイストス)の自動車修理工場に行き、鉄の矢を焼き切り、抜きとってもらう。そして、苦痛を抱えたまま教室に戻る。そこでは、校長のジーマーマンがすでに生徒たちの騒ぎを静め、ジョージに授業を続行させ、それを今学期の校長の授業参観にするという。

このように、第一章は現代と神話の二つの時代が混交して語りだされる形になっているから、読者をとまどわせる。現実的でない場面を神話の比喻として読む必要があるし、また文体自体も現代風になったり、古文調になったりもする。一例を引けば、ジョージが苦痛を抱えたまま、校内に戻ってくる場面で、彼は体育館のシャワー室から出てきた体育の女教師ヴェラ・ハメル(ハメル氏夫人で、神話のアフロディーテー)に出くわす。彼女は浮気な女として有名だが、ジョージに好意を持っている。

……その緑色のドアが少し開いていて、ヴェラ・ハメルが湯気の中に

立つ姿が垣間見えた。水色のタオルを身体に優雅に巻いてはいたが、琥珀色の陰部が水のしずくで白々となっている。

「まあ、ケイローン兄ではございません。サテュロンのような眼差しをされ、なぜわたしを見つめておられるの？ 神々はあなたには珍しくもないはず」

「ヴィーナス様」彼は頭をうやうやしくさげて言う。「あなた様のあまりの美しさに心うたれ、しばし我を忘れ、血のつながりの事などこへやら」⁽¹⁰⁾

と、アップダイクは書く。まさに擬古文であるが、しかし小説の大半はピーターの語りから成っているから、現代文であり、父と息子の日常的な行動がこと細かに語りだされる。従って、そこでは主人公のジョージ・コールドウェルは踵に矢など受けてはいない。冒頭の章で描かれる鉄製の毒矢はピーターが語りだす部分で登場する父の存在の比喩となっている。読者はジョージの章を読む時は、常に神話を念頭に置き、比喩的な読みを要請されることになっている。

では、ジョージにとって比喩として示される「永遠の苦痛」とは何であろうか？ 簡単に言ってしまうと、それは「生きる」苦痛である。「ダメ男」として生き続けることが彼にとっては苦しい。なぜなら、彼は自分の現世の「生」を無意味だと感じていて、いつでも「死」を受け入れてよいと考えている。

彼は教育に携わる人間であるが、教育を信ずることができない。神話の中のケイローンは数々の神々に教え、賢者として知られているのに、現実のジョージは教師が何を話しても、生徒は忘れてしまうものと嘆く。「教えていて気づくことはそれだ。連中はこっちが話すすべてのものを忘れてしまう。私は毎日生徒たちのぼんやりとした馬鹿面を眺めているだけ。それは私に〈死〉を思い起こさせてくれるよ」⁽¹¹⁾ とさえ心の中で語っている。ひどい話だと思われるかもしれないが、教育の経験を持つ者であれば、これに多少の共感を持つはずである。教師とは時折りの示唆にしか意味はない。学ぶのは生徒自身であり、彼らの創造力と努力が教育を成立させている。コールドウェルは自虐的に自らの職を軽視できる人間である。

この自虐的な虚無感を彼は神職者であった父親から得ていた。この父親は、前に述べたアップダイクの現実の祖父をモデルとしていると思えるが、神職

者でありながら声を失い、晩年には不運で死の床についている。ジョージはこう語る。

……おやじはいよいよ駄目とわかっていたんだろうね。横たわっていたベッドの上で眼を開けて、母とアルマ(姉のこと)と私を見て言ったんだ。「わたしは永遠に忘れ去られてしまうのだろうかね？」と。いつもその言葉が忘れられんよ。永遠に忘れ去られる。ひどい言い草じゃないか。牧師が口にするには、私はその言葉に肝をつぶしたよ。おそろしくさえなったね。(12)

たしかに、永遠の生を説くべき神職者が「死」を息子に「永遠に忘れ去られる」と示唆していったことは強い衝撃を与えたに違いない。それがトラウマのように彼の心に根ざし、生きること、そしてそれに伴う所業の空しさを教え、自分のような男は当然のように死んでしまえば人々から「永遠に忘れ去られる」存在と考えたのであろう。

ジョージが卑屈なほどに他人に親切にするのはこの彼の「生と死」の意識のためだろう。「ダメ男」を自認する彼にとって、自らの存在が無意味であると意識することからも、他者に親切にすること、他者のために「生きる」ことにこそ多少の意義を求めた。この考え方は、『走れ、ウサギ』(*Rabbit, Run*)に登場する牧師イクレスの信条とよく似ている。イクレスは代々神職者の家に生まれたから職業として牧師になった男である。真に神を信じ、帰依して神職についたわけではない。現代の知的な若者として神さえ信ずることができない男であるが、誠実な彼は、自らの「不信」の埋め合わせをするかのように教区の人々や共同社会の人々に必要以上に親切にし、援けようとしている。

ジョージも同じである。彼もまた必要以上に他者に気を遣い、優しく親切である。彼は出来の悪い女生徒にテストの問題をほぼ教えてしまうし、間抜けな水泳選手のディーフェンドーフには執拗なほどに称賛の言葉を与える。学校へ行く途中、車に同乗させてやる浮浪者のような男に愛想を振りまき、時間に遅れるのも承知で、男の目的地まで連れていく。彼のこのような行為は数多く語られるが、それがことごとく息子のピーターを当惑させ、苛立たせる。

小説の物語は、一月の中旬、月曜日の朝、ジョージがピーターを車に乗せ

て学校へ向かうところから始まり、三日後にやっとのことで二人が家に辿りつくまでの行動を描いている。その三日間は、ジョージの不運と愚行の連続で、彼の「ダメ男」ぶりがピーターの見たまま、語り出されている。

学校では、ジョージは生徒たちを統制できず、授業がうまく進まない苦痛だけを感じており、校長の顔ばかりうかがっている始末。その日の夜は彼が部長をつとめる水泳部とウェスト・オルトン校との試合で、試合に敗れ、ピーターを伴って家に帰ろうとするが、寒さのため彼の車のエンジンがスタートしない。弱り果てた二人は、金がないのにオルトンの町のホテルに泊り、ジョージは空小切手を切らざるをえない始末である。翌朝、彼はハメル氏に頼み、車を運んでもらい、修理をしてもらう。だがその夜は、雪が降りだし、おまけに恒例のバスケットボールの試合で、チケットの管理をしているジョージは最後まで残らなければならない。もちろん試合は敗退で、二人は車で雪道を帰ろうとするが、車は降雪のため、途中で坂道を登り切ることができずに、雪の中に埋もれてしまう。二人は町まで雪道を歩き、ハメル氏の家に行きかかると、一夜を過ごす。そして、翌日は雪のために休校となり、ハメル氏のお陰で車を雪の中から掘りおこしてもらい、かろうじて家へ帰りつく。

ジョージは言う。「こういうことが私には生涯おこり続けてきたことなんだ。おまえを巻きこんで、ほんとに悪いなあ」⁽¹³⁾と。

ピーターは困惑する。彼は父の不運と他者へのお節介にも似た行為に苛立つ。しかもピーターには彼なりの思春期の問題がある。それは、彼が抱えている肉体的な問題（乾癬と吃音癖）と母から強制的に与えられている将来への「飛翔」への意欲である。彼はこの二つの問題の呪縛から解き放されなければならない。

比喩としては、短い終章^{エピローグ}で示されるように、ケイローンは永遠の苦痛に耐えかねて、ゼウスに死を願って、プロメテウスの解放をその代りに求める。そして、ゼウスは長年の友ケイローンを愛していたので、その願いを聞きいれて、彼を天上に迎える。しかし、これは比喩であって、現実、つまり現代のジョージ・コールドウェルの死と考えるわけにはいかない。

おそらく、彼は自ら「死」と同じと考えていた教職と日常の日々を生き続け、息子ピーターを自分の存在と小さな環境から解き放つように生きるのであろう。それが、ゼウスに願った自らの「死」の代償となったのであろう。これは推測の読みでしかないのだが。

現実のアップダイクの父親は彼がハーヴァード大学へ進学した後も生き続け、シリングトン高校や町の一つの人気者となっている。1960年代になって心臓発作で一時入院するが(「四つの物語」の中に登場している)、その後回復し、再び発作をおこし1972年に亡くなっている。そのことは「父の涙」に描かれているとおりでである。

ピーターを思春期に抱えていた問題から自らの死を代償にして解放するという比喻としてこのケイローンの物語を読めば、そこには父を「ダメ男」として描きながらも、作家としての冷静さ、客観性を見ることができると同時に、ピーターの語る調子の端々に父への優しい想いを感じざるをえない。「父の涙」で、ハーヴァード大学と恋人の許へ帰ろうとして気のはやる主人公に父が握手して流す涙は、この『ケンタウロス』のジョージの涙でもある。それは悲しみというより、むしろピーターの解放が完成した姿を目前にして流した感激の涙であるかもしれない。自分の「死」と考えた「生」の意義が多少でも稔ったことを感じた満ち足りた涙でさえあるかもしれない。

注

- (1) 『麗澤レビュー』14号における「ジョン・アップダイク——作家形成の背景」(pp. 139-148)にウェスリーの経歴について述べてある。
- (2) “My Father's Tears” in *My Father's Tears* (New York: Ballantine Book, 2009)
- (3) *Ibid.*, p. 193.
- (4) “Twin Bed in Rome” in *Too Far to Go* (New York: Fawcett Crest, 1979)
- (5) *My Father's Tears*, p. 211.
- (6) “The Lucide Eye in Silver Town,” in *Assorted Prose* (New York: Alfred A. Knopff, 1965)
- (7) *Ibid.*, p. 198.
- (8) *My Father's Tears*, p. 198.
- (9) *The Centaur* (New York: Alfred A. Knopff, 1963), p. 3.
- (10) *Ibid.*, p. 21.
- (11) *Ibid.*, p. 92.
- (12) *Ibid.*, p. 92.
- (13) *Ibid.*, p. 150.